

新刊紹介

若松 隆・山田 徹編著

『ヨーロッパ分権改革の新潮流——地域主義と補完性原理——』(中央大学出版部、2008年7月発行、vi+211ページ、2400円+税)

—————石坂 昭雄

近年、ヨーロッパ統合の一層の前進のなかで、改めて大きく進んでいるのが地域分権であり、そうした改革を支える歴史的公共哲学としてわが国でも最近はよく引用されるようになったのが「補完性原理」(ないし「近接性原理」)である。本書は、行政学・行政学・政治学・憲法学の専門家たちが、こうした改革の成果を「補完性原理」と関連づけながら明らかにするために取り組んだ共同研究の成果であり、次の8編の論文から構成されている。

第1章 若松 隆「スペイン自治権国家の実態と変容——カタルーニャ自治州の事例を中心に——」

第2章 山田 徹「ドイツにおける連邦制改革の現状——第52次基本法改正によせて——」

第3章 高橋利安「イタリアにおける地方分権と補完性原理」

第4章 津田由美子「ベルギー連邦制の展開と課題——補完性原理(サブシディアリティ)と社会統合(ソリダリティ)——」

第5章 田口 晃「スイス連邦制における補完性原理——新財政調整をめぐって——」

第6章 穴見 明「スウェーデンにおける地域レベルの統治組織の改革」

第7章 山崎幹根「スコットランド分権改革の経過と課題」

第8章 西村 茂「フランスと補完性原理——州の現状と2003年憲法改正——」

これらの論文で扱われている国々での分権改革は、現在の全ヨーロッパ的潮流に棹差していると同時にそれぞれに長い歴史的遺産を背負っており、その意味でも一つ一つが興味深い、わが国での「道州制」との関連でとりわけ、参

考となるのが、フランス革命以来長らく中央集権的単一国家体制を取り続けたフランスと、それを模範としてきたスペインとイタリアの事例(第1章、第3章、第8章)で、いずれも、憲法改正によって中央集権的な県制度から、広域の地域——州や地域——の創設と、立法権や財源の譲許も含めた権限委譲が進み、とりわけスペインでは、カタルーニャやバスクという民族問題をもこの枠組みで解決を計ってきた。これに対してイギリスの場合(第7章)は、連邦ないし、自治州方式ではなく、スコットランド(およびウェールズや北アイルランド)のような歴史的に独自の制度をもつ辺境地域にのみ独自の自治政府(議会と行政府)を認めたが、両者の全体的関係は、なおウェストミンスター議会によって律せられ、財政収入の80%が中央政府からの交付金で賄われていること、イングランドの地方からの不平等に対する不満など、なお種々の問題が指摘されている。

さて、地方分権が徹底し、邦相互の関係を厳密に規定している連邦国家の場合も、現状ではいくつかの大幅な改革を必要としている。第2章は、戦後の長い歴史を持つドイツ連邦共和国における、福祉国家の行き詰まりやヨーロッパ連合に向けての調整などのなかでの、連邦と邦との行政、財政、立法の権限の再調整を含む、戦後最大の基本法改正(2006年)を扱っている。また第4章では、1993年について連邦制に移行したベルギーの2民族地域間の経済格差のなかでの社会保障を含む財政や所得移転の問題での対立によって、連邦の機能がしばしば麻痺に陥っている経過が明らかにされ、第5章で小国ながら連邦国家としての長い歴史を経ているス

イスにおける、連邦と各州、州相互の財政調整の成功が詳しく述べられている。

本書のそれぞれの章は、「補完性原理」や「近接性原理」と関連づけられてはいるが、今日もなおかなり多義的に理解され用いられている「補完性原理」そのものの概念や歴史、また、現

在ヨーロッパで進みつつある、国家の下位領域である「地域」への分権化の理念との関連を通観し整理する一章が是非とも欲しかった。もともと本書にはそれが予定されていたが、執筆者の事情で実現しなかったのは非常に残念である。

鈴木光太郎著

『オオカミ少女はいなかった 心理学の神話をめぐる冒険』(新曜社、2008年9月発行、2600円+税)

●—————武川 一彦

書名は伏すが、私が学生時代に使っていた教育学の教科書に次のような一節がある。「人間は、生理的な成熟を土台としながら、社会的・歴史的な人間的・文化的環境との相互交渉のなかで、学習を通じて、さらには学習の意図的な指導である教育を受けることによって、人間としての成長・発達をとげる。こうした人間の発達にとっての文化と教育の本質的な意味を私たちに示してくれるのは、人間の社会と文化から隔絶したところで育った孤立児や野生児(動物に育てられた子)の事例である。これらの事例のうち、信頼できる事実として日本でも広く知られているものに、フランスのアヴェロン野生児(18世紀末—19世紀前半)とインドの狼少女カマラ(1912—29)の場合がある」。本書のタイトルの「オオカミ少女」とは、この「インドの狼少女」のことにほかならない。「信頼できる事実として日本でも広く知られている」と記されていたオオカミ少女がいなかったのである。

これまでオオカミ少女は概ね次のように語られてきた。1920年にインドでオオカミに育てられていた2人の少女アマラとカマラが発見された。発見者のシング牧師は自らが経営する孤児院に引き取り、妻とともに献身的に2人の養育にあたる。アマラは発見の1年後に病死するが、カマラは9年間生き続けた。その間に、なんとか二足歩行はできるようになったが言語的なコミュニケーションはほとんど進歩せず最終的に

習得できた単語は45語でしかなかった。この事例からは、ヒトが人間となっていくためには人間の社会と文化のなかで学習をし教育を受けることが必要であることわかる、と。

著者はこのオオカミ少女の話が脚色・捏造されていたことを、シング牧師の残した資料(養育日記、写真)の矛盾を指摘しながら説得的に論じている。近年、教育関係者のなかでも「本当にオオカミに育てられたのか」、「自閉症ではないのか」などの疑問が出され信憑性をめぐり議論されることもあったが、本書が論争に決着をつけたと思われる。

本書はオオカミ少女をはじめ、サブリミナル効果や双生児研究など心理学の世界で「神話」となっている8つの発見・研究成果を検証している。著者は文化人類学者のドナルド・ブラウンにならない「学問の世界において、否定されたり反証が出たりしても、死に絶えることなく何度も不死のようによみがえる話」を「神話」と呼んでいる。それぞれの「神話」はどのように生まれ流布したのか、なぜ信じられ続けるのか。これを心理学の世界の内側だけではなく、広く社会状況とも関連させながら解き明かしていく。この検証の過程は心理学の門外漢である私には非常に新鮮でスリリングであった。

「神話」は心理学ばかりでなく様々な学問分野で存在するだろう。神話の呪縛を逃れるためにはどうしたらよいか。著者の答えは明快である。